脱施設化ガイドライン案への世界のコメント（2022年6月）　No.34

**エレーヌ・バルカノバら（ブルガリア）**



and

Network of Independent Experts – NIE

**Written submission**

from Elena Valkanova, Iva Velikova[[1]](#footnote-1)

to the Committee on the Rights of Persons with Disabilities (CRPD)

この文章は、ブルガリアに拠点を置くNGOである独立専門職ネットワーク（NIE）に、インタビューを通じて口頭で提出されたものである。文章は、バリディティ財団（Validity Foundation）の支援を受けてNIEが翻訳した。翻訳以外の編集上の変更はない。

私たちの意見は脱施設化（DI）ガイドラインは正しい方向への一歩だということである。

私たちの意見では、現在私たちがいるような「ホーム」／ファミリータイプの居住センターに閉じ込められるのは間違っている。このような施設で異なる障害のある人々と一緒になるのは良いことではない。混在させるべきではないし、すべての人に責任を持つ職員の代わりに、一人ひとりに個別のアプローチをすべきである。

障害者一人ひとりにパーソナル・アシスタントをつけるべきで、そのアシスタントは、ただ上司のように命令するのではなく、障害者をサポートし、彼らが必要とするあらゆることを支援すべきである。

障害者一人ひとりに、地域社会（施設の外）での生活の準備を手伝い、励まし、必要であれば訓練してくれるような、彼らの適応を助けてくれる助言者がいれば大変良い。

また、各自が自由に行動できるようにする必要がある。私たちは、申告書に記入したり許可を求めたりすることなく、行きたいところに行けるようになりたいし、自分の意志で自由に生活するための手段や住居も欲しい。

私たちの意見では、私たちが今住んでいる「ホーム」は、住みやすいアパート（海外の例がある）のような支援型住宅に取って代わられるべきだ。

住みやすい場所とは、バリアフリー（アクセシブル）で、医療センターに近く、市内にあり、障害者が利用しやすい公共交通機関がある場所である。

私たちは働く能力を持ちたいと考えており、就職の障壁になる障害者判定（ТЕЛК）は望んでいない。私たちはまた、障壁の代わりに、障害のある人々への配慮を図るべきだと考えている。

提供されるサポートが個人的なものでなく、異なるニーズを持つすべての人に同じである場合、このサポートは適切であるとは言えず、施設の証であると考える。スタッフがいて、そのスタッフが障害のある人のグループ全体を担当する場合、これは個人志向のサポートを妨げることになる。

3. 自立して自由に生活するために必要なことがいくつかある：（訳注　原文に1，2はなく、いきなり３となっている。）

まず、私を信じてくれる人が欲しい。私をおとしめ、私には何もできない、私には無理だと言うような人ではなく。このようなことは「ホーム」ではよくあることで、もしあなたが何かできるとわかったら、彼らは常にあなたを利用しようとする。

私たちは、自分の面倒を見て生きていくために働かなければならない。

このサポートは、身体障害者である私たちだけに提供されるのではなく、何らかの理由で「ホーム」に暮らすすべての人、施設で暮らすすべての人に提供されるべきだと私たちは信じている。

精神障害（mental disabilities）者は、医師からもっと支援を受ける必要があり、攻撃的な人は、即座に薬を処方するのではなく、個人的な会話やその他の方法でもっと支援を受ける必要がある。

これがガイドラインに関する私たちの意見である。

プロブディフ（ブルガリア）

日付： 2022.06.12

注：本投稿で提示された意見はエレナとイヴァのものであり、エレナとイヴァが協議プロセスに参加することを可能にした団体の意見を必ずしも反映するものではない。

（翻訳：佐藤久夫、尾上裕亮）

1. 著者らは障害者で、ファミリータイプの居住センターの居住者である。 [↑](#footnote-ref-1)